

まくわりの支柱栽培に関する研究

第1報 整枝法と栽植距離について

宮路 龍典

(鹿児島県農業試験場)

MIYAJI, R.

Studies on the Later Retarding Culture of Tomato Plant in the Warm District.

(I) On the methods of growing seedlings.

筆者は1959年に異つたタイプの4品種を用い半促成、早熟栽培を前提としたハウス支柱栽培について予備試験を行い、品種、栽植法を中心に整枝、摘芯、蔓の処理などを検討した結果、慣行地這の4~5倍の増収が可能で品質が優れるなど多くの利点があつて極めて有望であることを明らかにした。今回は本試験としてトンネルとハウス早熟における整枝法並びに栽植距離試験を行つたので、その概要を報告する。

試験材料及び方法

品種は榮寿と和光を用い1960年2月20日播種、4月15日定植、畦巾180cm2条として整枝法は子蔓4, 3, 2本, 栽植距離は1子蔓当り25, 22.5, 20cmを組合せ1区4~24株の2区制とした。

試験成績並びに考察

整枝法について、草勢は榮寿のように割合草勢の弱い品種は子蔓仕立の少ないもの程よく、草勢の強い和光は3~2本仕立がよい。収穫時期も子蔓数の少ないものが早く、収量についても草勢と全く同様傾向がみられる。

第1表 トンネル早熟における整枝法試験 (1a当り収量・1960年)

品種	整枝法	上果		下果		合計		標準比		上果歩合		上果1個平均重
		個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	
榮寿	4本仕立	1,050	353	180	33	1,230	386	100	100	85	91	336
	3本仕立	1,233	380	129	18	1,361	397	111	103	91	96	308
	2本仕立	1,270	411	208	29	1,477	440	120	114	86	93	324
和光	4本仕立	1,163	338	216	25	1,584	363	100	100	73	93	291
	3本仕立	2,016	485	157	18	2,174	502	137	138	93	96	240
	2本仕立	1,544	369	165	14	1,715	383	108	106	90	96	239

第2表 ハウス早熟における整枝法並びに栽植距離試験 (1a当り収量・1960年)

区	項目 整枝法 ×株間	上果		下果		合計		標準比		上果歩合		上果1個平均重
		個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	
4×100		1,778	402	139	9	1,917	411	100	100	93	98	226
4×90		2,191	420	216	25	2,407	445	126	108	91	94	192
4×80		2,257	526	486	28	2,743	555	143	135	82	95	233
3×75		1,178	394	111	5	1,889	399	99	97	94	99	222
3×67.5		2,058	468	41	3	2,099	471	109	114	98	99	227
3×65		2,361	550	139	14	2,500	564	130	137	94	97	233
2×50		2,500	572	222	19	2,722	591	142	144	92	99	229
2×45		2,593	654	62	7	2,654	662	138	161	98	99	252
2×40		3,541	997	417	55	3,958	1,052	206	256	90	95	282

る。病害、果の品質は整枝法による差は判然としなかつた。整枝法は初期からの草勢、特に子蔓の直立伸長性如何がそのまま収量、その他に影響するところ極めて大きい。

栽植距離について草勢は、観察では明らかでないが、蔓重、蔓径では粗植程、蔓が太い傾向があり、病害は和光の密植区にタンソ病の発生がやや多かつた。収量は榮寿が密植になるに従つて多くはつきりした傾向がみられるのに反し、和光は区間に一定の傾向が認められない。

結 言

整枝法については子蔓の直立伸長性(草勢)と収量間に正の相関々係がみられ、草勢のやや弱い榮寿級の品種では2本仕立とし、肥効を集中して株の老化を防止し、草勢の強い和光程度の品種は3~2本とする。栽植距離については榮寿は子蔓当り20cmでよく、和光は25cm程度とみればよい。整枝法や栽植距離は管理の集約さと関係が深く、また草勢の強弱で差を生ずるので、それに応じた適切な管理が必要といえよう